

学習国語辞典における教育上の工夫に関する一考察 —重要語句の変遷に着目して—

高野 秀晴・中村 信穂

仁愛大学人間生活学部

A Study on Educational Approaches in Japanese Dictionaries for Students
:Focusing on Changes in Important Words and Phrases

Hideharu TAKANO and Shiho NAKAMURA

Faculty of Human Life, Jin-ai University

本論文では、三省堂が小学生向けに発行した国語辞典のうち、1959年から2015年に発行された5冊を取り上げ、比較考察を行った。はじめに、これらの辞典に小学生の学習のための配慮や工夫がどのように見られるかを考察した。その結果、時代を経るにつれて、学習のための配慮の幅が広がってくる実態をつかむことができた。次に、小学生向けの国語辞典の大きな特徴である重要語句について考察した。その結果、各版において重要語句の総数に大差はないが、選ばれる語句は時代を反映しての変化がみられることが明らかとなった。また、改訂を重ねるなかで「次男」は重要語句でなくなるのに対し、「次女」はすべての版で重要語句であり続けることや、正式な資格名称である「医師」ではなく「医者」の方が重要語句に選ばれていることなどから、重要語句は単に語句の重要性や頻用性のみから選ばれるとは限らず、その選定にもまた、子どもの学習への配慮の反映が見て取れることを明らかにした。

キーワード：国語辞典、国語教育、重要語句、『三省堂小学国語辞典』、『三省堂例解小学国語辞典』

1 はじめに

本論文は、小学生向けの国語辞典（以下、学習国語辞典と呼ぶ）において、子どもの学習に対する配慮がどのように表れているかを、主に重要語句の変遷に着目しながら考察するものである。

2011年に刊行され、翌々年に映画化もされた、三浦しをん『舟を編む』には、辞書を真摯につくる人々の姿が描き出され、辞書が人の手によってつくり出されるものであることを印象深く示してくれている。この作品の流行に促され、近年辞書に関する著作の刊行が盛んになっている。飯間（2013, 2014）、神永（2015, 2017）、今野（2014, 2015）、佐々木（2014）、サンキュータツオ（2013）、増井（2013）、松井（2014）、水野（2013）など、枚挙に暇がないほどである。その多くが新書や文庫本で発刊、再刊されていることから、多

くの読者が見込める対象として、辞書への注目が集まっていることが分かる。

これらの著作のなかには、今野（2014, 2015）などのように、日本語研究の一資料として辞書に着目するものもあるが、その大半は、辞書編纂に携わった者の筆になる点で共通している。したがって、これらの著作には、なかなか想像の及ぶにくい辞書編纂の現場について、多くの貴重な証言を見いだすことができる。けれども、安田（2006）が述べるように、こうした証言は、多かれ少なかれ、辞書編纂者の超人的な「偉業」として読まれていくこととなり、辞書の権威や規範性を高める効果をもつ。確かに、水野（2013）のように、辞書の語釈を拾い上げ、その内容に偏りがあることを批判する研究もあるが、終章が「『広辞苑』は規範たりうるか」と題されていることから分かるように、

その批判の前提には、辞書は規範であるべきだという考え方が一貫して見て取れる。また、サンキュータツオ（2013）は、辞書の「遊び方」を提唱するユニークな著作である。同書では、様々な国語辞典の特徴が擬人化して示され、自分に合った辞書を選ぶことの楽しさを、自動車の車種選びになぞらえている。けれども、こうした「遊び」が面白く感じられるのは、国語辞典というものが、本来「遊び」には似つかわしくない、権威を帯びたものであるという前提があるからこそだといえる。このように見てくると、安田（2006）のいう「辞書市場」は、著者たちの意図にかかわらず、辞書の権威や規範性を再生産するものとして、強固に存在し続けていると見た方がよいだろう。

言葉を扱ううえで、間違いのない基準に頼りたくなことはある。けれども、その基準が規範となり、時にその規範が言葉を扱ううえでの妨げとなることも確かである。辞書とは人が真摯につくるものなのだからこそ、辞書を規範として無批判に崇める態度は慎むべきだろう。権威や規範性をあらかじめ前提にするのではない形で辞書を考察する方法として、本論文では、二つのことに着目する。

一つは、辞書の経年変化に着目することである。一つの国語辞典は数年ごとに改版されていく。その改版により、辞書の内容は変化していく。その変化を追うことにより、辞書の規範が絶対的なものではなく、歴史的に形成されるものだということを示せるだろう。

辞書研究においては、数種の辞書を並べて比較考察する方法がしばしば取られるが、一つの種類の辞書を経年的に考察することは、『言海』や『広辞苑』といった著名な辞書を除けば、ほとんど行われていない。おそらく、古くなった版の辞書の入手が意外にも困難であることが一因だと考えられる。けれども、経年変化を追うことは、辞書を考察するうえで、もっと試みられてよい方法だと考える。

もう一つは、小学生向けに編まれた学習国語辞典を取り上げることである。先述の安田（2006）は、辞書が規範化していくうえで、学校現場での辞書引きの習慣化が大きな役割をもつことを指摘している。そして、学習指導要領の変遷を辿るなかで、「辞書には「正しい」ことしか書かれていないという思いこみ」を植え

付ける傾向が強まっていることに危惧を表明している。

安田の考察は、辞書の内容に踏み込むものではないが、佐竹（1984）は、5冊の学習国語辞典を分析し、用例に登場する人物が男性に偏っていること、また、男は外、女は家事という「強固な役割分担意識」に基づく用例が多く見られることを明らかにしている。佐竹によれば、「辞書は、小学生にとっては大人にとって以上に権威ある規範として受けとられるものである」。辞書の権威を考察するうえで、学校現場で用いられる学習国語辞典に着目する意義は大きいといえよう。

ところが、学習国語辞典について取り上げた研究は意外にも少ない。例えば、金武（2000）は、21種もの国語辞典を取り上げ、比較考察を行った労作であるが、その中に学習国語辞典は1冊も含まれていない。

確かにこれまでも、学習国語辞典は、国語教育を推進するうえで検討の対象とされてきた。例えば、雑誌『教育科学国語教育』では、「「辞書」の活用で魅力ある授業を創る」（632号、2003）や「“辞書引き”習慣をつくる授業アイデア」（760号、2013）といった特集が組まれ、多くの小学校教諭による実践記録等が掲載されている。だが、これらの論考は、辞書を引くことはよいことだという前提のもと、辞書の活用法を検討するものであり、辞書（を引くという営み）そのものを批判的に検討していく視点に乏しい。このことに関連して、平井（2017）は、教員の辞書理解の低さを指摘するが、辞書そのものの内容の検討も並行して進める必要があるだろう。先の佐竹（1984）や、窪田（1975）、ことばと女を考える会（1985）などにおいて、辞書の語釈には再考を要するものがあることが指摘されているなかで、辞書を批判的に見ていく視点は、学校教育においても当然必要となる。

また、そもそも学習国語辞典が小学生にとって使い易いものとは言えないことを指摘する研究に、大塚（2017）がある。大塚は、学習国語辞典の使用実態を調査し、辞書を引いても語釈が理解できなかったり、そもそも見出し語を見つけられなかったりという小学生が思いのほか多いことを明らかにしている。

だが、学習国語辞典には、子どもが使い易いようにとの配慮から、様々な工夫が凝らされていることも事実である。後述するように、学習国語辞典では、誤っ

た読み方の語句などもあえて見出し語として掲載することで、調べたい語句に子どもが辿り着けるようにするといった配慮がみられる場合がある。

「この辞典をいつも手もとに置いて、ことばに強い人になってください」。これは『三省堂例解小学国語辞典』初版に書かれた編者の願いだが、同様の意味合いを持つ文章は、今回研究で使用した辞典内に多く見られた。学習国語辞典が子どもの学習に深く関与していることは、大変興味深い。本論文では、そうした学習国語辞典の学習的側面に着目することとする。そうすることにより、規範であることを求められ続ける辞書において、子どもに向けてどのような言葉がどのように提示されてきたのかについて考察を行いたい。

学習的側面のうち、本論文で特に注目したいのが「重要語句」である。学習国語辞典では、特に重要と思われる見出し語を赤字で示したり、分かり易くマークを付けたりするなどの工夫が見られる。辞典によって、また同じ辞典であっても改訂されるごとに名称は変化するが、そうした言葉を本論文では「重要語句」と呼ぶことにする。これは『三省堂例解小学国語辞典』第六版から借りた表現である。

重要語句を設けることは1950年代から既に学習国語辞典に見られた工夫であり、現在発行されている辞典にも継続して存在する。学習国語辞典に見られる特徴の一つと言ってよいだろう。

後に表1で示すように、1959年発行の『三省堂小学国語辞典』初版における重要語句は、「たいせつ」「必要」「基礎」といった観点から選ばれている。一見このようなキーワードを聞くと、重要語句は一定的なものの、いつの時代にも適応する変動の少ない語群のように思える。しかし発行された年の異なる同一の辞典を用いて、重要語句の比較を行ったところ、実は重要語句は必ずしも一定ではないことが分かった。改訂を重ねる中で消えゆく重要語句もあれば、また新しく重要語句となった見出し語も多く見られた。ここで注目すべきは、変化する重要語句もあれば、改訂を重ねても重要語句であり続ける言葉もあるということだ。

以下、本論文では、三省堂発行の学習国語辞典を取り上げ、学習国語辞典ならではの特色について概観する。次に、重要語句の変遷を辿りながら、子どもにとつ

て大切とされる言葉をめぐって考察するものとする。

2 本研究の調査資料と調査方法

今回、学習国語辞典の重要語句を研究するにあたって、三省堂発行の学習国語辞典を計5冊使用した。その5冊は下記の通りである。

石黒修編（1959）『三省堂小学国語辞典』初版。

石黒修編（1971）『三省堂小学国語辞典』第三版。

石黒修、中沢政雄編（1986）『三省堂小学国語辞典』第七版。

田近洵一編（1997）『三省堂例解小学国語辞典』初版。

田近洵一編（2015）『三省堂例解小学国語辞典』第六版。

（以下、これらの辞典を上から順に、「初版」「第三版」「第七版」「例解初版」「例解第六版」と略称する。）

『三省堂小学国語辞典』は1989年発行の第八版まで、『三省堂例解小学国語辞典』は2018年現在で第六版までの改訂と発行が行われている。今回は『三省堂小学国語辞典』初版が発行された1959年を起点として、その後およそ10年ごとの変遷を調べるために取り上げる辞典を選び、調査対象とした。

上記の辞典には、途中で名称に違いが見られるが、『三省堂例解小学国語辞典』は『三省堂小学国語辞典』を受け継いだ形で生まれた辞典である。二つの辞典を関連付ける事柄として、『三省堂小学国語辞典』において編修を手伝った人物とされる田近が、『三省堂例解小学国語辞典』では編者の立場にいることを挙げる。

現在、学習国語辞典は多くの出版社から発行されており、辞書全体の中でも一つのジャンルを築いている。その中で三省堂発行の学習国語辞典を選択した理由は、飯間（2010）による「小学生用の本格的な学習辞典は、1959年の『三省堂小学国語辞典』に始まります」という記述にある。飯間は初版以前にも学習国語辞典は皆無ではないと前置きしたうえで、他の学習国語辞典については、初版から文言を引用し、「おとなの辞典の焼き直しと思われるものが少なくありません」と述べている。また、第七版にも「この「小学国語辞典」は、

いまから約三十年前、小学生のための国語辞典として、日本で初めて作られた最も古い歴史のある辞典です」とはっきりと記述している（なお、例解初版になると、辞典の歴史について触れられている箇所は、見受けられなくなる）。

しかし、学習国語辞典が『三省堂小学国語辞典』に始まると断定するのは、いささか誇張した言い方ではある。実際に1959年以前にも学習のためと銘打った辞典は発行されている。1952年発行の小林国雄編『児童国語辞典』（信学社）を例に挙げる。『児童国語辞典』の「例言」の箇所を見ると、そこには、「一、この辞書は、小学校二、三年生ぐらいから卒業しても使えるように作ったものである」とある。また「はしがき」を見ても、「この『児童国語辞典』は、読むときにも書くときにも使えるようにした。正確な新字体を用いて、活字を大きくし、国語教科書のことばを全部入れ、その上、児童の日常語を入れたので、安心して使用できる」とある。こうした記述を踏まえると、『児童国語辞典』が小学生の学習を考慮した辞典であるといえなくもない。少なくとも、「おとなの辞典の焼き直し」ではないと考えられる。また前述した飯間の意見と第七版に記された文章は、どちらも三省堂側から発信された情報である。中立の立場の者が言ったことでないことも考慮すべきだろう。

とはいえ、本研究で使用する資料が、現在まで続く歴史ある学習国語辞典であること、初版から継続して重要語句という学習者のための工夫を取り入れた辞典であることは確かだ。重要語句を年代ごとに比較するという目的に適していると判断し、調査対象に選んだ。

次に調査方法について説明する。

1、まず、最も発行が古い初版に記載された重要語句を抜き出し、表に一覧として羅列する。

2、発行年が古い順に、重要語句を抜き出す。このとき、既出の重要語句と新出の重要語句とを区別して纏める。例えば、第三版の重要語句を抜き出す際、初版と比較して新出の重要語句があった場合、その言葉は既出の重要語句とは区別しておく。最も発行年が新しい例解第六版まで同様の方法を取り、表を纏める。

3、改訂が進むにつれて現れた重要語句がそれよりも古い版の辞典でどのような扱いをされていたかを調

べ、表に纏める。例えば第三版で新出した重要語句が、初版において、見出し語として記載はあったのかどうかを確認する。

このような方法により、重要語句の変遷を調査した。

3 学習国語辞典としての特色

重要語句について取り上げる前に、そもそも本論文で取り上げる辞典には、学習という側面から見て、どのような配慮や工夫が凝らされているかを記述する。

辞書に掲載される見出し語は、その辞書を発行する側が取捨選択するものだが、幅広い年齢層での使用を想定してつくられる大人向けの辞典と学習国語辞典との収録語数を比べてみる。2015年発行の例解第六版の収録語数は約35500語であるのに対し、同じ出版元である『三省堂国語辞典』第七版（2014）には、約82000語の項目が取り上げられている。この収録語数の差から分かる通り、どのような年齢層に向けて辞典をつくるかによって、その辞典の内容は変化する。注目したいのは、学習国語辞典が子どもの学習に役立つようにつくられていることだ。

とりわけ顕著な違いを示すために、初版と例解初版を比べる。結論から言えば、初版から子どもの学習に対しての配慮はされてきたが、例解初版になると、より子どもの目線に立った工夫が増加している。

初版では、主に「読み書き」に関する配慮に力が入れている。そのことが分かる箇所を初版の「まえがき」から抜き出す。

世間には辞典といえば、むずかしいことばや、読めない漢字を引くものだと思っている人が多いし、そういう辞典がたくさん出ています。しかし、辞典は、文を書くとき、ちょっと思い出せない漢字をしらべたり、これでいいかどうかははっきりしないことばや、字を見るときにも必要なものです。それで、この辞典は、そういうどちらにも使って、役だつようにつくりました。

本を読むときだけでなく、文を書くときや漢字を調べたいときなど、子どもが学習時に字を確かめるための手段としても、辞典が位置づけられている。編者で

ある石黒や、編纂に携わった中沢は小学校での教員の経験がある。そうした、辞典を手がけた側の背景を見ても、初版から子どもの学習という側面を考慮して編纂されたことが窺える。

改訂が重ねられた例解初版でも子どもの読み書きに役立つような取り組みがなされている。例えば、例解初版以降では、辞典内に「例解コラム」と呼ばれる言葉の学習を助ける読み物が登場する。全部で6種類の例解コラムがあり、「学習の広場」「作品の広場」「使いわけ」「ことばの広場」「表現の広場」「ことばの広がり」がある。ここでは「使いわけ」の例として「あう」の同音異義語に関するコラムを挙げる。

例解初版には、「あう」の同音異義語が見出し語として三つ記載されている。「合う」「会う」「遭う」である。それぞれの言葉について、コラムでは次のような文章を書き添えてある。

合う…目と目が合う。箱の大きさが合う。話が合う。
 会う…友達に会う。公園で会う。
 遭う…夕立に遭う。事故に遭う。ひどい目に遭う。

こうした説明文に、分かり易いイラストが添えられている。これは元々、語釈内にあった用例部分をコラムとして大きく掲載しているのだろうと考えられる。小さな文字で示すよりも子どもの目に留まり易く、またイラスト付きであることから、内容も理解し易い。読み書きの際、子どもが「あう」の意味や用法に迷ったとき、コラムを見れば答えに辿り着き易いだろう。初版に見られた工夫が、例解初版ではより子どもの目線に立った形で現れているといえる。

次に、辞典でものを調べるという観点から子どもの学習について考える。例解初版では初版と比べ、より沢山の言葉を辞典で調べることができるように、見出し語の選定に大きな変化があった。例解初版以降では、見出し語に固有名詞が出現した。

初版では「先生ならびに父兄の方々へ」の項目で、固有名詞を省いて見出し語の選定が行われたことが、はっきりと記述されている。しかし例解初版になると、子どもの知りたいという欲求に応え、学習に役立てられるように、見出し語に百科項目が出現した。いくつ

か例を挙げる。作品名では「大造じいさんとがん」「ごんぎつね」「今昔物語」「シンデレラ」など、人名では「徳川家康」「森鷗外」「ゴッホ」「シェークスピア」など、動植物では「シーラカンス」「やどかり」「しゅろ」「ぜんまい」など、他にも「国会議事堂」「五重の塔」「大化の改新」などがある。例解初版の編集委員であった近藤（2009a）は、「この「例解」は、前身が国語辞典の小学生版であるのに比べて、内容が一新され、いわば学習のための辞典となった」と述べている。その理由として、前述したような人名、地名、専門用語などの百科項目と、例解コラムが新たに取り入れられたことを挙げている。

初版の「まえがき」に次のような文章がある。「この辞典は、いつもそばにおいて、読むときにも書く（作文）ときにも使う辞典です」。この文章にある「いつもそばにおいて」という編者の願いは、本研究で利用した5冊に共通して見られた表現だ。辞典は他の読み物とは違い、その用途から何度も繰り返し使用することに意味がある。そのためには、辞典は面白いものでなければならない。手に取ることが億劫になるような厄介さや難しさが取り払われ、子どもが手に取り易いということを重視する。国語辞典だから固有名詞は見出し語にはしない、という方針を取り止めたことも、そうした想いが反映した結果だと考えられる。このように初版から例解初版まで、「いつもそばにおいて」という辞典に対する想いを同じくしながら、改訂が重ねられるごとに、子どもの学習の幅に対する配慮を広げてきたのだと思われる。

4 重要語句の意味や示され方

以下に見ていく重要語句もまた、子どもの学習に対する配慮から設けられたものである。重要語句を取り上げるにあたり、まず、今回利用した5冊の辞典において、重要語句がどのような意味合いの見出し語として説明されているか、どのような示され方がなされているかを整理する。下記に表1として纏める。

まず、重要語句の「示され方」について見る。注目したいのは、第三版から重要語句の示され方に色が使われ始めたことだ。辞典は小学生が普段触れる読み物の中でも特に文字が小さく、また小さな文字が羅列し

表1 重要語句の示され方と説明文

版 名	示 され 方	説 明 文	
		まえがき（注1）	凡例（注2）
初 版	*が付してある	「とくにたいせつな、ぜひ必要なことば」「たいせつな基礎語彙」	「よく使われることばや、とくにたいせつなことば」
第 三 版	赤字で*が付してある	「特にたいせつな、もともになることば」	「もともになるたいせつなことば」
第 七 版	・赤字で*が付してある ・動詞は大きな活字	「小学生のみなさんにとって、特に大事なことば約三千語」	「特に小学生にとっていいことば、これだけは意味も使い方も正しく知っていなければならないことば（中略）大きな活字で印刷してあることばは、どれも動作などを表すことば（動詞）で、特にふだんよく使われる大事なことば」
例 解 初 版	語句が赤字	記述なし	「とくに重要なことば」「よく使われることば」
例解第六版	赤い旗印が付してある	記述なし	「重要語句：重要な言葉、ふだんの生活でいい言葉」

注1：「まえがき」に相当する箇所全般を指すものとする。

注2：「凡例」など、辞典の使い方を説明している箇所全般を指すものとする。

た書物だ。どの見出し語が重要語句かを示す手段として、赤字で目に付き易くするというのは、有効な手段であると考えられる。

次に重要語句を説明する箇所に触れる。重要語句を説明する箇所として「まえがき」と「凡例」の二つに分けて表に纏めた。前者は、編者から使い手に対してのメッセージ性がある箇所であり、後者は子どもに対して分かり易く辞典の説明がなされている箇所だ。例えば第七版では架空の男の子と女の子が先生に質問する形式で辞典の使い方を説明していくなど、子どもが親しみやすい文章の構成が取られている。

表1の「説明文」の箇所を見ると、重要語句がどのような意味合いの言葉であるのかについての説明に、版ごとの大きな違いは見られなかった。表1を見ると、比較的、簡潔に重要語句の説明がなされている。このような説明文になる理由の一つは、学習国語辞典が子どもの使用する辞典であるからだと考えられる。同じ三省堂から発行されている『新明解国語辞典』第七版（2011）でも重要語を選定しているが、『新明解国語辞典』の「あとがき」には、重要語の選定基準について表1よりも詳しい記述が見られる。子どもが使用する辞典は様々なところで分かりやすさを重視し、簡略化がなされたことが、表1のような示し方に繋がっていると考えられる。

重要語句の説明に大きな違いはなかったが、辞書における重要語句の位置づけについては、版によって相違がある。表1の「まえがき」において、例解初版以降は重要語句についての記述がないことに注目する。

これは、重要語句が使い手に対して特記すべき情報ではなくなったことが理由の一つとして考えられる。つまり学習国語辞典に重要語句があるのは、当たり前のような感覚になったのではないか。

また、使い手に一番はじめに発信する情報として重要語句はそれ程大切ではなくなったのでは、とも考えられる。このことについて以下に述べる。初版の「まえがき」の箇所から一部を引用する。

この辞典の中にあることばは、みなさんが中学一、二年までに知っておかなければならないものです。めったに使われない、小学生にはあまり必要でないものをはぶいて、たいせつなことばや、字の説明をくわしくしました。とくにたいせつな、ぜひ必要なことばには、*のしるしがつけてあります。

引用した箇所を見ると、「知っておかなければならない」と断定した言い回しをしていることが分かる。先にも触れたが、初版から辞典は言葉を確認する手段として使用が勧められている。しかし初版では、調べることと共に、小学生にとって基礎となる言葉を覚えることも重要視されていたことが、上記の言い回しから推察できる。しかし例解初版になると、この表現が少し変わってくる。まえがきに相当する箇所である「小学生のみなさんへ」から引用する。

小学生のみなさんは、もちろんこんなにたくさんのことばを、全部知っている必要はありません。小

表2 各版における重要語句の総数

	初版	第三版	第七版	例解初版	例解第六版
A. 重要語句の総数	3215	3069	2412	3289	3194
B. 新出の重要語句の数		49 (5)	319 (21)	784 (41)	83 (2)
C. 重要語句のうち、初版でも重要語句として取り扱われている語句の数		3025 (5)	2101 (20)	2241 (37)	2116 (2)

注：括弧内の数は、もとは一つの見出し語として掲載されていたものが、複数の見出し語に分化した語句の内数を指す。

学生のみなさんにとってだいじなことは、たくさん
のことばを知っていることではなく、意味や使い方がよくわからないとき、それを調べようとする
ことです。わからないことを調べようすることは、
ことばを正確に使おうとすることであり、自分から
ことばを学ぼうとすることだからです。

注目すべきは「全部知っている必要はありません」という部分だ。「知っておかなければならない」という文言とは、対照的な言い方がなされている。また、使い手にとって大切なことは言葉を知っていることではなく、調べるこそそのものであることが述べられている。過程を重視するという、教育的側面も視野に入れた編者からのメッセージである。

例解初版以降では新たに百科項目が取り入れられたことは、先に述べた通りである。百科項目が見出し語に選定されたことで、辞典内に掲載される言葉はその数も分野も広がりを見せた。初版では約17000語であった収録語数が、例解初版では約32000語にまで増加している。辞典内で編者は、多くの言葉を収録するのは、使い手の調べたいという欲求にできるだけ応えたいからであると述べている。

重要語句は元々、「知っておかなければならない」言葉から選び出した更に大切な言葉の語群だ。それが、改訂を重ねる中で辞典に多くの言葉が掲載されるようになり、辞典はもの調べという側面を充実させていった。「まえがき」において、例解初版以降に重要語句についての記述がない理由は、そうしたことに起因するのではと考える。

5 重要語句の変遷に関する調査結果

この章では、調査対象とした計5冊の学習国語辞典に基づく、重要語句の変遷に関する調査結果を詳しく

記述する。

5.1 重要語句の総数

本研究によって分かった、初版から例解第六版までの重要語句の総数等を表2に纏める。はじめに、表2について説明する。Aは、その版に見られる重要語句の総数である。Bは重要語句のうち、表の左隣の版にはない新出の重要語句の数である。なお、本論文内での「新出の重要語句」とは、研究で使用した5冊の辞典においての話であり、研究で使用していない他の版については、考察の対象からは外することとする。Cは、初版に掲載された重要語句と各版の辞典の重要語句とを比べたものである。重要語句となっている語のうち、初版においても重要語句とされていた見出し語の数を表わしている。

表3 掲載語句が分化する例（「あく」の場合）

初版	第三版	第七版	例解初版	例解第六版
あく	あく	空く 開く	空く 開く	空く 開く

次に、括弧内に記されている数について説明する。重要語句の中には改訂を重ねる中で意味内容が分化する見出し語があり、その数を表したものである。例えば、表3に示したように、「あく」は、改訂が進む中でより語釈が詳細となった形で、「空く」と「開く」の二つの見出し語に分かれるようになる。今回は意味内容が分化したものも新出の重要語句の一つとして数え、別途、括弧内にその数を記した。ただし、重要語句の意味内容の分化は、語釈の読み比べから筆者本人が独断で判断したものであり、主観的な調査方法であったことをここに断っておく。

Cの数を見てほしい。初版の3215語の重要語句の内、第三版では3025語が同一であり、例解第六版になるとその数が2116語まで減少している。改訂を経ての重要

語句の入れ替わりが見て取れるが、しかし第七版と例解初版を比較すると、改訂の後にCの数が増加していることが分かる。これは先に述べた意味内容の分化によるものと、また一度重要語句でなくなった見出し語が再度重要語句となる場合などもあることが原因と考えられる。

意味内容が分化する見出し語で特に顕著となった問題が漢字の表記についてである。見出し語の意味内容が分化するパターンとして、①ひらがな表記であった見出し語が分化の際に漢字表記となる、②はじめてから見出し語に漢字表記が二つあり、それが分化の際に二つの見出し語に分かれる、③一つの漢字表記から分化の際にもう一つの漢字表記が現れる、と様々であった。表3に示した例は①のパターンである。問題となったものが③であり、語釈を見ると分化しているように見て取れるが、ただの新出の重要語句のようにも取れる。漢字の表記については改訂が進むにつれて、より整然となった印象を受ける。

表2を見てほしい。まず、重要語句の総数についてであるが、第七版を除けば、3000から3300の間という類似性が確認できた。ここで全収録語のうち重要語句が占める割合について考える。収録語数は、初版では約17000語、第七版では約30000語、例解初版では約32000語、例解第六版では約35500語と、改訂を重ねるごとに増え続けている(第三版に関しては収録語数の記載なしであった)。つまり、収録語数が増えれば重要語句も増える訳ではないということだ。重要語句がある一定した基準によって選ばれた言葉の語群であると、推察することができる。

次に第七版の重要語句の総数を見てほしい。他の版よりも、重要語句の総数が飛び抜けて少ない。この結果が指しているのは、第七版よりも発行が古い辞典に掲載された重要語句が、第七版では重要語句になっていないということである。Cの数を見ても、第三版と比べると第七版の数は極端に少なく、初版からかなりの数の重要語句が削られたことが分かる。しかし新出の重要語句の数も少なくないため、このことから重要語句を削る作業、増やす作業が第七版では活発であったことが読み取れる。また、新出の重要語句が最も多かったのは、例解初版であった。辞典の名称が変わり、

子どもの学習の幅に対する配慮が増加したこの時期に、新出の重要語句も増えたことが分かる。

重要語句は一定した基準で選ばれた語群であるのと同時に、版によって選定される見出し語が異なってくることが分かった。その数を多い、少ないと判断することは難しいが、どの版においても同様に選定されるというわけではないことが判明した。

版によって重要語句に違いが見られることも確かであるが、重要語句には継続して選定される見出し語も存在する。初版から例解第六版まで、継続して重要語句であった言葉は計1899であった。削られる、増えるという改訂作業の中で継続して重要語句であり続けた意味を考えると、時代の流れに関わらず、子どもたちに身近であった言葉として、これら1899語を位置づけてよいと考える。なお、語群の掲載は、紙数の関係で割愛せざるを得ない。

表2には含まなかったが、例解第六版に登場する「国語学習用語」についても調査の結果を纏める。国語学習用語とは、「国語の学習で大事な言葉」のことであり、見出し語に鉛筆のマークが付されている。重要語句とは選定基準の異なる、名前の通り国語に関する言葉であるが、重要語句の中には国語学習用語としても取り扱われている見出し語があるため、研究の対象に入れることとする。

例解第六版において国語学習用語である見出し語は計702であった。その内、例解第六版での新出の見出し語は計569であった。国語学習用語の多くが新出の見出し語であったということだ。また、重要語句との関係性についても記す。例解第六版には国語学習用語と重要語句のどちらの扱いもされている見出し語があり、それらは計106あった。また例解第六版よりも古い辞典では重要語句として扱われ、例解第六版では国語学習用語としてだけ取り扱われている見出し語もあり、それらは計37あった。

注目するのは例解第六版において国語学習用語としても、重要語句としても取り扱われている計106の見出し語である。それらの言葉は、重要語句としての意味合いと、国語学習用語としての意味合いをどちらも含んだ言葉ということになる。下記はその語群である。語群を見ると、小学校での国語の学習に使用する基礎

的な用語であるような印象を受ける。学習国語辞典を使用する子どもたちにとって大切な言葉であることは、確かであろう。

インタビュー、外来語、語句、こそあど言葉、情景、情報、スピーチ、対話、話し合い、リズム、脚、表す、意見、意味、印象、受け身、描く、会議、解釈、会話、書き言葉、書く、括弧、活用、仮名、漢字、感想、聞く、喜劇、記号、擬声語、気持ち、疑問、記録、句読点、敬語、結論、原稿、国語、言葉、諺、材料、作者、作品、作文、司会、辞典、主語、趣旨、主題、主張、述語、小説、焦点、資料、人物、新聞、随筆、筋、墨、説明、想像、大体、題名、例え、テーマ、手紙、問い、討議、討論、童話、読者、読書、特色、図書、内容、日記、話し言葉、撥ねる、場面、比較、批評、表現、平仮名、文学、文章、返事、報告、放送、報道、間、漫画、メモ、黙読、文字、物語、問題、山、要点、読み、読み物、読む、朗読、ローマ字、録音、話題

5.2 重要語句の変遷の全体的傾向

表2で示した通り、各版には新出の重要語句がある。この項目では、各版で新しく重要語句となった言葉に共通点などがないか探る。しかし各版に現れる新出の重要語句に厳密な規則のようなものはなく、あくまで筆者個人の気付きであることをここに断っておく。また、ここで取り上げる新出の重要語句は、意味内容の分化によって現れたものを省く。

まず、第三版での新出の重要語句について触れる。計44と少ない新出の重要語句の中に、15の助詞や助動詞を含む言葉が確認できる。これは割合としては多い方であると考え。例としては、「が」「と」「に」「ね」(全て助詞)などである。また、第七版では「学習」「学期」「学級」「教室」という子どもに深く関わりのある言葉が、新出の重要語句として見られる。これらの言葉はそれ以降の版でも継続して重要語句として取り扱われている。学校生活を想定して、第七版から重要語句となったのだと推測する。例解第六版ではカタカナの言葉が新出の重要語句として多かった。カタカナの言葉については、後により詳しく触れる。

次に、特に気になった新出の重要語句を挙げる。例解初版の新出の重要語句には、それより発行が古い版で記載のあった重要語句と対になる形で、転成名詞が多く見られる。転成名詞とは、動詞または形容詞、形容動詞が名詞化し、生まれた言葉である。例を挙げると、「空くー空き」「遊ぶー遊び」「争うー争い」「悲しむー悲しみ」「思うー思い」などである。このように例解初版になると、抽象的な名詞が多く現れるようになる。

また重要語句とはなっていないが、辞典に掲載された見出し語の中で気になる転成名詞があった。それは「いじめ」である。いじめは1980年代の半ば頃から社会的な問題となっており、現在でも学校や職場などにおいて重大な問題事として、その言葉は世間に広く知られている。「いじめ」は「いじめる」の転成名詞である。「いじめ」という言葉は例解初版では見出し語として記載がなく、「いじめる」という言葉だけが辞典に掲載されている。改訂が重ねられ、「いじめ」の見出し語が出現するのは2011年発行の第五版からであることが分かった。これは比較的最近発行された辞典である。大人も使用する辞典である『三省堂国語辞典』の場合も調査した。「いじめ」という見出し語が出現したのは2001年発行の第五版からであり、どちらの辞典もいじめが社会問題となってから多くの時間が経過した後、辞典に見出し語として掲載されている。また『三省堂国語辞典』では「いじめ」の前身のような形で第四版まで「いじめっこ」という見出し語が掲載されている。「いじめっこ」は第五版になると、見出し語ではなくなる。第四版での「いじめっこ」の語釈は、「弱い子どもをいじめて喜ぶ、わんぱくな子」という、今のいじめに関するイメージとは大きく異なったものであり、いじめ問題の深刻化を背景に見出し語として削除されたものと思われる。

第三版では助詞や助動詞、第七版では学校用語、例解初版では転成名詞というように、僅かながらではあるが、新出の重要語句には版ごとに共通点があることが発見できた。新出の重要語句を見ると、どうしてこれまで重要語句ではなかったのかと疑問に思う言葉に出合う。それだけ学習国語辞典に見出し語として掲載されている言葉が私たちの生活に身近な、使用頻度の

高い言葉であるのだろうと考える。

5.3 時代を反映する重要語句

重要語句の中には、その年代を特に反映した言葉がある。例えば「読本」「百姓」「蚊帳」などの言葉は、今の小学生にはあまり馴染みがない。これらの言葉は例解第六版では重要語句の扱いになっていないが、初版では重要語句として取り扱われていた。

この項目では、以前は重要語句として取り扱われていたが改訂を重ねた後、見出し語としても消えてしまった言葉を書き出してみる。また見出し語として消えたといっても、改訂が重ねられ、再び重要語句として掲載されるようになった言葉は除外した。

される、二十、行くえ（いくえ）、小使、蓄音機、放課、名代、夜業、買える、公德、こじき、好かれる、存じ、地平、電熱、名あて、博物、はげ、物理、太さ、封建、郵税、金高、国立、産婆、地代、水産、父母（ちちはは）、中学、天文、水菓、もったい、都政、破れ

このような、計34の見出し語が確認できた。またこれらの言葉のほとんどが、初版に新出した重要語句であり、それ以外の版で新出した見出し語は「都政」と「破れ」の二つのみであった。都政は例解初版で、破れは第七版で新出した重要語句だ。

これらの語群は、純粋な言葉の風化によって消滅した見出し語と、そうとは言い切れない見出し語とに大別できる。前者の例として「蓄音機」や「産婆」などを挙げる。あまり見聞きしない言葉であり、現代では、その役割を他のものが担っている言葉だ。「蓄音機」はCDプレイヤー、「産婆」は国家資格をもつ助産師、というようにである。「小使」や「こじき」も現代では見聞きしない言葉である。これらは、人によっては差別的な意味合いに捉えられてしまう言葉だ。二つの見出し語の語釈に差別的な考えを示唆するものは含まれてはいないように見えるが、社会全体の言葉へのイメージが、見出し語の削除に繋がったのではないかと推測することもできる。「蓄音機」「産婆」「小使」「こじき」が時代の移り変わりによって、子どもの生活と

離れていったことは事実であり、子どもに寄り添う辞典という立場から見出し語が削除されたのではと考える。

また、風化したとは言い切れない見出し語として、「放課」「公德」「地平」「電熱」「博物」「封建」「国立」「水産」「天文」を挙げる。これらの言葉は、その言葉を使用した複合名詞が最も新しい辞典である例解第六版に掲載されており、その意味では完全に削除されているわけではない見出し語だ。「放課」は「放課後」、「公德」は「公德心」、「地平」は「地平線」、「電熱」は「電熱器」、「博物」は「博物館」、「国立」は「国立公園」などがその例である。しかしこれらの複合名詞が重要語句となっている例はない。複合名詞は、重要語句となっていた見出し語の付属の見出し語のような状態で掲載されていた場合が多く（完全な見出し語とはなっておらず、重要語句の隣に文字のサイズを小さくするような形で掲載されている）、それが重要語句の削除にともなって、複合名詞だけが残った例が多い。ある一つの単語よりも、その単語を使用した複合名詞の方がより子どもに身近であると判断され、見出し語の削除に繋がっていく例もあることが分かる。

また、読み方の淘汰という問題もある。「行くえ（いくえ）」と「父母（ちちはは）」はそれぞれ「ゆくえ」、「ふぼ」という読み方で掲載されている。特に「ゆくえ」に関しては、例解初版以降の語釈に「特別に認められた読み方」と説明がなされており、これは熟字訓を指している。元々は「いくえ」「ゆくえ」どちらの読み方でもよいとされていたものが、「ゆくえ」の方を子どもに示すべき言葉としたことが分かる。また、この「いくえ」に関する問題は、後述する「ひずめ」の場合と非常に似通っているのではと考える。「いくえ」を『三省堂国語辞典』第七版（2014）で引いたが、見出し語として記載はない。「いくえ」は、子どもが「ゆくえ」に辿り着くために設けられた見出し語であると考えられる。

以上のように、一度は重要語句として選定された後、その言葉が見出し語としても消えた理由は、様々に推察できる。

5.4 カタカナの言葉について

辞典の見出し語の中には、ひらがなではなく、カタカナで表記されているものがある。このような外来語は初版の頃から取り扱われ、辞典の巻末ページにある「付録」にも「ことばの種類」の中に、外国からきたことばとして紹介されている。重要語句にもカタカナで表記された言葉が、初版から例解第六版までの間に計115あった。以下、カタカナ表記の重要語句を、初版・第三版・第七版と例解初版・例解第六版の二つのグループに分けて比較する。

- a. 初版・第三版・第七版と例解初版・例解第六版のどちらにも重要語句として記載のある見出し語（内、5冊全てにおいて重要語句の記載があった見出し語を括弧内に示す）

（ガス、キロ、スポーツ、テスト、テレビ、ニュース、プレーキ、ページ、ペン、ボール、メートル、メモ、ラジオ、リレー、ローマ字）

ガラス、ストップ、グラム、パン、ヒント、リットル

- b. 初版・第三版・第七版のグループのみに重要語句として記載のある見出し語

カルタ、キャラメル、コップ、ゴム、シャツ、スカート、スケッチ、ストーブ、ズボン、ソース、ソーダ、ダース、タバコ、ダム、チョコレート、テーブル、デパート、テント、トタン、ナイフ、ニッケル、バケツ、バス、パス、ハンカチ、ハンドル、ピアノ、ビール、ビスケット、ピストル、ビル、プール、フォーク、フライ、プラットホーム、ブリキ、ボート、ポケット、ボタン、ポンプ、マッチ、マント、ミシン、メーター、モーター、ランプ、レース、レクリエーション、レコード、レンズ、ロケーション、センチ（「ボタン」については、指で押すボタンと、洋服に付いているボタンとの意味内容の分化が改訂を重ねる中で出現する）

- c. 例解初版・例解第六版のグループのみに重要語句として記載のある見出し語

エネルギー、キック、スタート、ゼロ、センチメートル、テーマ、ミリメートル、ミリリットル、アウト、アナウンサー、インタビュー、エラー、エンジ

ン、オーバー、オープン、オリンピック、カード、カーブ、カット、クイズ、グラウンド、クラス、クラブ、グループ、ゲーム、コース、ゴール、サイン、ジャンプ、スピーチ、タイム、チーム、チャンス、テープ、プラス、プレゼント、プログラム、ベスト、マイナス、リズム、ルール

以上の語群のうち、「ローマ字」に関しては漢字表記が入っているが、カタカナの言葉に含めることとした。また「カルタ」と「タバコ」は例解初版から表記がカタカナからひらがなに変化している。これは日本語として取り扱われるようになった時期が古く、外来語としての認識が薄まった結果だと思われる。しかし、カルタ、タバコ共に初版、第三版、第七版ではカタカナ表記であるために、bの区分に含めることとした。

bとcに注目する。二つの区分を比べてみると、ある相違点が見えてくる。bの語群は、生活に身近な物の名前が非常に多い。例えば食べ物である「キャラメル」や「チョコレート」、衣服に関する「ズボン」「スカート」「ボタン」、多くの家庭で生活用品として見られる「ストーブ」「ミシン」「テーブル」などである。これに対してcの語群では、形のない抽象的なものを表す言葉が非常に多い。それらの言葉は小学校の授業の最中に使用されると思われるものも多々ある。例えば「ミリメートル」「ミリリットル」は算数の時間に、「インタビュー」「スピーチ」は国語の時間に使用する様子が想像できる。またcの語群中、はじめは見出し語としても記載のなかった言葉として「キック」「ミリリットル」「アウト」「インタビュー」「エラー」「オーバー」「オープン」「クラブ」「ゲーム」「スピーチ」がある。授業の最中に使用されそうな言葉もあり、はじめは辞典にも掲載していなかった言葉が子どもに示すべき言葉になったことが分かる。年代ごとに比較すると、カタカナ表記の重要語句には相違が見られる結果となった。

前述したa, b, cの語群にあるような言葉は、現代の人々の間に浸透している言葉であると言ってもよいと思われる。金（2011）は、元々は日本語にとってよそ者であった外来語が、言葉の普及、浸透によって確実に日本の語彙体系の中で位置を変化させていると指

摘し、「いまや、外来語は、日本語の基本語彙の中に少なからず入り込み、日常の書きことば・話しことばの中でも数多く使われている」と述べている。また、このような「外来語の基本語化」の中でも抽象的な意味を表す外来語に注目し、「20世紀の後半に基本語化した外来語には、生活の近代化という言語外的な条件によってその使用が増えたと考えられる「テレビ」「ホテル」「ビル」「エンジン」「スキー」などの具体名詞のほかに、「タイプ」「システム」「バランス」「ケース」「トラブル」のような抽象的な意味を表す名詞が少なからず認められる」とも述べている。金が述べたことは、前に挙げたa, b, cの語群の特徴と一致する部分が大きい。子どもたちに示す重要語句として、抽象的な外来語が多く現れるようになったということである。このような外来語に対する価値観の変化は、学習国語辞典にもはっきり現れているといえる。

6 言葉の重要性をどう判定するか

既に述べたように、本論文で取り上げた辞典において、重要語句は「たいせつ」「必要」「基礎」といった観点から選定されている。ところが、重要語句の中には、この観点には収まり切らないような語句も含まれている。また、そもそも見出し語として必要なのか考えさせられるものもある。本章では、このような面白いと感じる言葉や不思議に感じる言葉について記述する。

6.1 長男、長女、次男、次女の重要度

重要語句の中でも、同程度の重要度であろうと判断できる言葉がある。長男、長女、次男、次女の四つの語句をその例として挙げる。各版における重要語句としての記載の有無について表4に纏める。

表4 「長男」「長女」「次男」「次女」の扱い

	初版	第三版	第七版	例解初版	例解第六版
長男	あり	あり	なし	なし	なし
長女	あり	あり	なし	なし	なし
次男	あり	あり	あり	なし	なし
次女	あり	あり	あり	あり	あり

注1: 「あり」は重要語句として記載されていることを指す。

注2: 「なし」は重要語句としては記載がないが、見出し語としては掲載されていることを指す。

表を見ると、長男、長女、次男は改訂を重ねる中で、重要語句としては取り扱われなくなり、唯一次女だけが例解第六版でも重要語句として取り扱われている。このように違いがみられるのはいったいなぜであろうか。筆者の推論を述べる。

言葉には同じ音をした違う意味の言葉がある。こうした同音異義語が、次女には他の三つの言葉よりも多くみられることが原因ではないかと考えた。小学館発行の『日本国語大辞典』第二版を引いてみる。その中で四つの言葉にそれぞれ同音異義の見出し語がいくつあるかを数える。長男が一つ、長女が一つ、次男が二つ、次女が十四あった。数で比べると、次女が圧倒的に同音異義語の数が多い。それらの同音異義語と次女という見出し語とを見誤らないために、次女を継続して重要語句として扱っているのではと筆者は考えた。しかし、上記は『日本国語大辞典』に掲載されていた同音異義語の見出し語数であり、例解第六版では次女の同音異義語である見出し語が一つ、他の三つの語句は同音異義語の見出し語がなかった。いずれにしても、推論の域をでない。

『三省堂小学国語辞典』の編者を務めた石黒（1957）は、基本語彙の調査に対して「頻度とか範囲を相当考慮して統計的に調査しても…「二月」と「十二月」との頻度は違ってきます」と述べている。そうした偏りの補正が語彙の調査には必要であるとし、もし偏りが生じていたとしても二月と十二月のような場合であれば、二語を同等なものとして扱ってもよいと示した。これを踏まえれば、次女は長男や長女と同等の扱いでよいのではないかと考える。少なくとも「たいせつ」「必要」「基礎」という観点から見れば、扱いに相違はなくてもよいのではないだろうか。

6.2 石は辞典に必要な語句であろうか

「石」というものを知らない人はあまりいないであろう。最も基礎的な日本語の一つであり、本研究で利用した5冊の学習国語辞典全てにおいて、石という語句は重要語句として取り扱われている。例解第六版では石を次のように説明している。「①岩の小さいもの。②（建物などの）材料となる石材。③宝石。④基石。⑤じゃんけんの形の一つ。「ぐう」のこと」。語釈は小

学生にも分かりやすい、適切なものであるように思われる。しかし、石という極めて単純な語句を辞典に載せる必要性がそもそもあるのかについて、鈴木（1973）は次のような考えを示している。ここでは鈴木が述べたことを二点に絞って記述する。

まず一つ目に「石の語釈は、石というものを他のものに言い換えたに過ぎず、語釈の循環が起きている」ということだ。鈴木が例として示した石の語釈では、岩を用いて石を説明している。例解第六版でも岩を用いて説明しているが、岩の語釈をみると「石の大きいもの、岩石」と書かれている。これでは、語釈の循環に陥ってしまっている。二つ目に挙げるのは「石というものを体験的に知っている者が、あらためて辞典を引く必要がない」ということである。鈴木は「基礎語は、どの国の言語でも、小児が成長する過程において、日々の生活の場の中でなんとなく身についてくる」と述べている。ここでいう基礎語とは、「更にやさしい一語またはいくつかのことばの単なる羅列で置き換えができないもの」である。つまり基礎語、ここでは石とは、その姿形を見た瞬間に「いし」という音と意味内容を一緒に理解するものであるため、わざわざ辞典を引く必要もないということだ。振り返れば、筆者自身は石といった単純な語句の意味が分からず、辞典を引いたことはない。石を本当の意味で知るには、言葉の説明を通してではなく、体験的に知るしかないのだ。鈴木は以上のような理由から、辞典で石という語句を扱うことに疑問を呈する独自の考えを示している。

しかし石という語句の意味が分からずに引く人間が少なからうと、石は重要語句に選出され続けている。これは、辞典の使い手に言葉の意味をより理解してほしいからというよりは、石という語句を重要語句に選出すること自体が必要なことであったからだと考えられる。つまり、石という最も基礎的な日本語の一つを重要語句に選出しないわけにはいかないという選定者の意思である。また、学習国語辞典では、使い手のために易しい表現が用いられる。こうしたことから岩を用いた表現は、子どもに石を説明する語釈として適した形なのかもしれない。鈴木（1973）に限らず、語釈の循環は批判されることが少なくないが、学習国語辞典においては、語釈の循環もまた、子どもの学習へ

の配慮という見方もできるかもしれない。

6.3 読み方や類語への配慮

「寂しい」や「瞑る」という漢字を何と読むだろう。二つの漢字にはそれぞれ二通りの読み方がある。「さびしい・さみしい」と「つぶる・つむる」である。このように、日本語には同じ意味でありながら、異なった音を持つ語句が存在する。「さびしい」「さみしい」「つぶる」「つむる」の四つの語句について、各版の重要語句としての記載の有無を表5に纏める。

表5 「さびしい」「さみしい」「つぶる」「つむる」の扱い

	初版	第三版	第七版	例解初版	例解第六版
さびしい	あり	あり	あり	あり	あり
さみしい	あり	あり	なし	なし	なし
つぶる	あり	あり	なし	なし	なし
つむる	あり	あり	なし	なし	なし

注1：「あり」は重要語句として記載されていることを指す。

注2：「なし」は重要語句としては記載がないが、見出し語としては掲載されていることを指す。

注3：「さびしい」は見出し語に漢字表記の記載がある。

表5を見ると、「つぶる」と「つむる」の二通りの言い方については、各版においての重要語句の扱いに違いは見られない。しかし、「さびしい」と「さみしい」については、「さびしい」という言い方が、初版から例解第六版まで継続して重要語句となっている。このことから、「さみしい」よりも「さびしい」という言い方に、重きが置かれているのではないかと考えられる。『日本国語大辞典』第二版の「さみしい」の語句の欄に、次のような記述が見られる。

現代「さびしい」「さみしい」は同じように用いられるが、古くからあった「さびしい」を標準的語形とみる考えが有力で、放送などでは「さびしい」が採用されている。

日常的に使用される際には、個人の好みで読みが選択されているが、辞典で見るとこのように微妙な差が分かる。また、こうしたバ行とマ行の音の違いは、他の多くの日本語に見られるものだ。「さみしい」の語源は、上代日本語の「さぶし」が「さびし」に変化し更に変化をとげたことにあり、バ行音とマ行音の音韻交替現象によって、「さみしい」という語句が生じて

いるのである。

こうした違う音でありながら、同じ意味の語句を国語辞典に掲載する理由の一つとして、使い手である子どもがどちらの音で辞典を引いてもその意味に辿り着けるようにということが考えられる。

このことを顕著に示す、学習国語辞典ならではの例として「ひずめ」と「ひづめ」を挙げる。各版における重要語句としての記載の有無と語釈について表6に纏める。

注目したいのは、「ひずめ」の例解初版以降の語釈に、この言葉は間違いであると記述されていることだ。また、第三版、第七版では語釈内で正しい表記である「ひづめ」へと使い手を誘導している。「ひずめ」は誤用であるため、『日本国語大辞典』第二版や『三省堂国語辞典』第七版には見出し語としての記載がない。学習国語辞典に、特別に見られる見出し語であるということだ。近藤（2009b）は、こうした誤用である見出し語を辞典に掲載するのは、『三省堂例解小学国語辞典』ならではの工夫と述べている。例解第六版では他にも誤用の見出し語を掲載しており、例として「外科（がいこ）」や「貴重（きじゅう）」、「建立（けんりつ）」、「最期（さいき）」などがある。これらの例は括弧内の音で見出し語を掲載し、正しい読み方の見出し

語へと使い手を導いている。改訂を重ね、子どもが正しい言葉の意味に辿り着けるような工夫が凝らされているのである。

最後に「医師」と「医者」の例を挙げる。「医者」は初版から例解第六版まで継続して重要語句となっており、「医師」は継続しての記載はあるが重要語句とはなっていない。二つの語句の語釈を表7に纏める。

第七版以前の医師の語釈は矢印を用いて、医者語の語釈を見るように、使い手を誘導している。例解初版、例解第六版の語釈を見ると、異なる箇所は「職業とする人」と「職業にしている人」のみであり、意味の差別化はあまり図られていない。ここで注目したいのが、参考の箇所である。例解初版、例解第六版では医者の参考の箇所に、「正式には「医師」という記述がはっきりとある。この「正式」とは何であろうか。また医師ではなく、正式ではない医者が重要語句となっているのはなぜであろうか。『日本国語大辞典』第二版の医師の語釈に次のようにある。

現在では、医療のほかに保健指導も行い、免許、試験、義務などすべて「医師法」の適用をうける。

医者語の語釈には、免許や試験、法律に関する記述は

表6 「ひずめ」「ひづめ」の扱いと語釈

		初 版	第三版	第七版	例解初版	例解第六版
ひずめ	重要語句の扱い	あり	なし	なし	なし	なし
	語釈	牛・馬・ヒツジなどの足の先にあるかたいつめ	→ひづめ	→ひづめ	「ひづめ」の誤り	「ひずめ」と書くのはまちがひ。正しくは「ひづめ」
ひづめ	重要語句の扱い	なし	あり	なし	なし	なし
	語釈	→ひずめ	牛・馬・ヒツジなどの足の先にあるかたいつめ	牛・馬・ヒツジなどの足の先にあるかたいつめ	牛・馬・羊などの足の先にあるかたいつめ	牛・馬・羊などの足の先にあるかたいつめ

注1：「あり」は重要語句として記載されていることを指す。

注2：「なし」は重要語句としては記載がないが、見出し語としては掲載されていることを指す。

表7 「医師」「医者」の語釈

	初 版	第三版	第七版	例解初版	例解第六版
医師	→いしゃ	→いしゃ	→いしゃ	病気やけがをなおすことを職業とする人。医者	病気やけがをなおすことを職業とする人。医者
医者	病気や、けがをなおす人。医師	病気や、けがをなおす人	病気やけがをなおす人。医師	病気やけがをなおすことを職業にしている人。医師 参考：正式には「医師」と言う	病気やけがをなおすことを職業にしている人。医師 参考：正式には「医師」と言う

ない。つまり、国家資格名称や法律名に医師が使用されていることが、医師を正式とする理由であると考えられる。また二つの語句の大きな違いとして、語句を使用したことわざ、慣用句の多さについて挙げる。『日本国語大辞典』第二版に記載されている、それぞれの語句のことわざ、慣用句を調べると、医師は記載なしであるのに対し、医者には計10の記載があった。これは、「医者」という言葉が「医師」よりも、昔から広く人々の間で普及していて、使用頻度が高いことを示していると考えられる。重要語句の選定基準としては、言葉の正式さよりも、使用頻度の高さや、その言葉が親しまれてきたかどうかということの方が重視されることもあるといえる。

7 おわりに

研究を通して子どもの学習を助けるための辞典が、形成されていく過程を知った。重要語句が規範化された単なる形だけの大切な言葉の語群でないことは、選定される語句の変遷からも明らかだ。辞書編纂者が子どもにとって大切な言葉とみなしたものが重要語句となるのであり、その選定がいかに難しいかを示しているともいえる。しかし、中には本研究で取り上げた全ての辞典において、重要語句として記載のある見出し語もあり、本論文ではそうした語句が計1899あることを示した。言葉は現在でも新しく生み出されたり、また死語として淘汰されたりと、ある程度の流行廃りが存在する。しかし、これら1899の重要語句に関しては、その流行廃りに当てはまらず、おそらくこれからも子どもたちにとって、そして大人にとっても基礎的な言葉であり続けるだろう。辞書を権威の象徴や規範とする見方よりも、人が真摯につくりあげたものという側面に本論文では重きを置いて考察を行ってきた。

今回は重要語句という主に言葉の重要度についての研究を進めてきた訳であるが、本来であれば、言葉はあくまで個人の興味のおもむくままに吸収していくべきであり、言葉を覚えることに、優先順位は必要ないとするのが筆者の意見である。今回、研究資料とした例解初版でも、同様の考え方が示されている。筆者が好きな言葉を辞典から抜き出す。「ページをひらくと、そこにはゆたかなことばの世界がひろがっている」。

辞典を開くことが楽しくなるような文言である。学習国語辞典ならではの工夫とその面白さについても、本研究で示せたのではないかと考える。

本論文では、重要語句をはじめとする学習国語辞典の学習的側面を経年的な変化に注意しながら考察した。しかしその変化がいかなる要因で生じたかについては、考察が及んでいない。考察は辞典に関することに留まり、例えば教科書に掲載された言葉と辞典に掲載された言葉との関連性や、教育政策や国語政策との関連性などについては考察できなかった。特に教科書との関連は、子どもの生活に密接した言葉について考察するうえで必要となるだろう。

2017年の学習指導要領の改訂に伴い、国語科における語彙指導の系統化が唱えられるようになっている。

1,2年生は「身近なことを表す語句」、3,4年生は「様子や行動、気持ちや性格を表す語句」、5,6年生は「思考に関わる語句」が取り上げられ、そうした言葉の使用が推奨されている。こうした動向は、子どもと辞典との関わりをますます深めていくことになると予測される。子どもたちの国語に関する学習と、辞典との関わりについてさらに詳しく研究することが、今後の課題である。

付 記

本論文は、中村信穂の2017年度卒業論文に加筆・修正を施したものである。本紀要の規定上、指導教員である高野が第一著者となっているが、本論文の業績は中村に帰すべきものであることを明記しておきたい。ただし、本研究に関する責任を共同で負うことはいうまでもない。

引用・参考文献

- 飯間浩明 (2010) 「国語辞典入門 第12回 さきがけとなった『三省堂小学国語辞典』」三省堂辞書ウェブ編集部 “Dictionaries & Beyond Word-Wise Web”
 〈 https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/kok_nyumon12 〉 (最終閲覧日: 2018年9月9日)。
 飯間浩明 (2013) 『辞書を編む』 光文社新書。
 飯間浩明 (2014) 『三省堂国語辞典のひみつ』 三省堂。
 石黒修 (1957) 「研究と主張」 西尾実編 『国語指導の

- 実際』筑摩書房.
- 大塚貴史 (2017) 「学習国語辞典の課題に関する試論」
『筑波日本語学研究』22号.
- 金武伸弥 (2000) 『『広辞苑』は信頼できるか』講談社.
- 神永曉 (2015) 『悩ましい国語辞典』時事通信出版局.
- 神永曉 (2017) 『さらに悩ましい国語辞典』時事通信出版局.
- 金愛蘭 (2011) 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3.
- 窪田享信 (1975) 「識字運動から“国語辞典”を告発する」『部落解放』69号.
- ことばと女を考える会 (1985) 『国語辞典にみる女性差別』三一書房.
- 近藤章 (2009a) 「子どもの変化に即応した新しさー第四版改訂作業から」『ことばの学び』18号, 三省堂.
- 近藤章 (2009b) 「学習のための国語辞典を目指してー第四版改訂作業から」『ことばの学び』19号, 三省堂.
- 今野真二 (2014) 『辞書をよむ』平凡社新書.
- 今野真二 (2015) 『超明解! 国語辞典』文春新書.
- 佐々木健一 (2014) 『辞書になった男』文藝春秋.
- 佐竹久仁子 (1984) 「辞書にみる女性観」『言語生活』387号, 筑摩書房.
- サンキュータツオ (2013) 『学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方』角川学芸出版.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書.
- 平井吾門 (2017) 「国語科で国語辞典を利用する前に考えるべきこと」『弘前大学教育学部紀要』118号.
- 増井元 (2013) 『辞書の仕事』岩波新書.
- 松井栄一 (2014) 『日本人の知らない日本一の国語辞典』小学館新書.
- 水野靖夫 (2013) 『『広辞苑』の罫』祥伝社新書.
- 安田敏朗 (2006) 『辞書の政治学』平凡社.